

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：10104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730392

研究課題名(和文) 引退期にあるトップ・アスリートの内的キャリア形成と支援の方法に関する研究

研究課題名(英文) Career Support Required for Self-Discovery among Top Japanese Athletes in Retirement Transition

研究代表者

小川 千里 (OGAWA, Olivia C.)

小樽商科大学・商学研究科・准教授

研究者番号：90340760

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、トップ・アスリートの競技引退、ならびに現役復帰に伴って起こる心理学的諸問題に対する具体的な支援の方法を検討した。研究の結果、引退期のトップ・アスリートは、「発達課題」(Erikson, 1959)に比し幼く、内的キャリアの言語化が困難である。よって「言語による内省」(キャリア・カウンセリング)よりは、「身体の動きを重視するエクササイズやワーク」(TAE、SGE)が有効である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to investigate career support for them during retirement transition. Exercises were reviewed from previous literature in career development, educational and counseling psychology, and some exercises in SGE (Structured Group Encounter) by Y. Kokubu and TAE (Thinking at Edge) by E. Gendlin and M. Hendrics were chosen in practice. In conclusion, this research shows that top Japanese athletes are significantly less mature than other students, and some exercises in SGE and TAE enhanced the understanding of themselves and helped in writing a self-profile during retirement transition.

研究分野：経営学

科研費の分科・細目：経営学

キーワード：キャリア発達 アスリート 引退 キャリア・カウンセリング 教育カウンセリング SGE TAE

1. 研究開始当初の背景

わが国のトップ・アスリートの現役引退と、その後のキャリアに対して関心が集まっていた。トップ・アスリートは、輝かしい競技戦績がある一方で、若くして引退というストレス・フルな出来事により困難や苦悩を経験し、セカンド・キャリア(第二の職業人生)を模索する状況に対峙する。引退時にコーチやスタッフなどの球団関係者としての仕事を提案されたとしても、幼いころから集中して行ってきた競技を引退するという事実を受けとめられずに、新たな職業や役割を認識する心理のプロセスが進みにくいことも多い。

Jリーグ・キャリアサポートセンターやパソナなど、スポーツ界や人材ビジネス産業は、すでに職業斡旋や技能訓練を念頭に置いた「外的キャリア(職業や社会でのキャリア)」(シャイン, 2006)に対する支援を行っていた。これらの支援は、引退や復帰を考える選手の複雑な心理的メカニズム、すなわち「内的キャリア(進むべき方向や自分の役割について、本人が主観的に認識するキャリア)」(シャイン, 2006)の形成に関わる支援を対象としていなかった。このことは、彼らのキャリアの動向に強く影響するチームの利害関係者だけでなく、日ごろ頻繁に関わっている監督・コーチでも、選手が求めるものをうまく認識しておらず、具体的な支援の方法を見いだせていない可能性を示唆していると本研究では考えていた。

一方、アスリートの現役引退に対する支援の方法については、学术界でも我が国の先行研究は希少であった。心理学的観点、特に個人の主観的理解から具体的な支援策を開発していく試みは当時ほとんど行われていなかった。また、引退した元アスリートの競技復帰は、引退からの心理的苦悩を乗り越えるために重要な出来事であるにもかかわらず、キャリア発達論から検討した研究が見あたらない。トップ・アスリートのキャリア・トランジションにおける現実的・具体的な支援策の開発が急務だと本研究は認識していた。

本研究は、トップ・アスリートの引退と復帰の心理学的問題を検討することで、選手と利害関係者の間にある認識のギャップを埋めていくこと、望ましいキャリア支援の実践的方法を解明し、国内外での経営学的研究に対する学術的貢献に寄与したいと考えた。また、社会的に認知度の高いトップ・アスリートが抱えるキャリア上の問題から引き出された結果は、企業を定年退職する高齢者をはじめ、あらゆるキャリア上の段階にある人々に対しても、大きな示唆を与えられることを期待した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、トップ・アスリートの競技引退、ならびに現役復帰に伴って起こる心理学的諸問題に対し、その具体的な支援の方法を検討することである。

具体的に言い換えれば、トップ・アスリートの引退・復帰に伴う心理的現象について、心理学・経営学的概念を用いた分析を行い、内的キャリアの形成に有効な支援の方法を開発していくことである。本研究の成果を通じて、「高齢者や若年者をはじめとした、あらゆるキャリア発達上のプロセスにある人々」に対する支援のモデル事例として提示したいと考えた。

3. 研究の方法

研究の方法は、(1)文献調査、分析モデルの洗練、初期分析および事例の選定、(2)インタビュー調査と分析、(3)支援方法の開発、(4)成果の取りまとめと公表であった。

(1)の段階では、キャリア・カウンセリング、教育カウンセリングおよび臨床心理学の分野において、教育実践計画の立案にかかわるものを広く把握した。

次に(2)の段階で調査に協力した者は、日本人元プロ・スポーツ選手、ならびに引退を経験したか、もしくは考えたことのある大学生アスリートであった。インタビュー・データの分析により「引退期のアスリートの状況についての言語化」と「具体的支援の方法の開発」を行った。「引退期のアスリートの状況についての言語化」では、教育カウンセリングやフォーカシングにおけるエクササイズを通じた質的データの分析、ならびに発達に関わる文献の検討を行なった。ここで明らかになった特徴を踏まえつつ、「具体的支援の方法の開発」のプロセスにおいては、キャリア・アンカーに関わるワークシート(キャリア・カウンセリング)、TAE(フォーカシング)とSGE(教育カウンセリング)におけるワークやエクササイズについて、引退期のアスリートに対する実施と振り返りの内容を分析し、有効性を検討した。

4. 研究成果

本研究で明らかになった成果は次の通りである。

(1) 引退期のアスリートに対する周囲の人による支援

元プロ・スポーツ選手に対する望ましい支援のスタンスについて検討を進めたところ、組織そのものや個人の支援の際の役割が充

実していることは大切であるが、それよりも支援する周囲の人の「その人らしさに基づく支援 (personal-oriented support)」が求められることがわかった。また、その中でも「アプローチチャビリティ (approachability)」は重要であった。アプローチチャビリティは、「(元)選手達が、いつでもどこでも、プライベートなことでも話題にできると感じるような、周囲の人がもつ魅力」である。

アプローチチャビリティは、次の4つの要素から構成されていた。「集約した情報 (career-related information)」:(元)選手達にとって魅力的な情報を、周囲の人がまとめてもっているということ。「受容 (acceptance)」:親身になって、いつでも自分を「受け容れてくれる」こと。「継続性 (availability)」:継続的に関係を構築でき、(元)選手との関係をあきらめて中断したりしないこと。「守秘 (confidentiality)」:(元)選手が打ち明けたことを秘密にできると信じさせるような要素、である。また、元プロ・スポーツ選手だけではなく、引退期にある大学生アスリートにもアプローチチャビリティは適用可能性が高いことが支援の実践を通じて感じられた。しかし、この背景となる要因等について、今後さらなる検討が望まれる。

(2) 引退期にあるアスリートの発達的特徴としての幼さ

引退期にあるアスリートの支援の方法を検討するにあたり、アスリートの発達的特徴を言語化して国内外にわかりやすく提示する必要があると考えた。本研究では、ジェンドリン、Eらの考え方に基づくTAE (Thinking at the Edge) のアプローチにより、その実態について言語化を試みた。TAEは、その人が抱いている「独特の感じ (フェルトセンス)」に焦点を合わせて、それを言葉で表現しようとするアプローチである。研究代表者がアスリートに日常的に接している経験を対象として、TAEにより言語化された結果を、さらに「心理社会的発達段階」(Erikson, 1959)に基づいて検討した。その結果、大学生アスリートは実年齢よりも若い段階の発達課題と危機に直面していることが示された。

(3) 教育カウンセリングやフォーカシングの分野における支援の方法の有効性

文献検討を通じて、興味・能力・価値観を認識し、言語化しようとするキャリア・カウンセリングのアプローチは、ビジネス・キャリアの経験がある人の自己分析に適していた。一方、TAEと教育カウンセリングの分野におけるSGE(構成的グループエンカウンタ

ー)は、身体の反応にアプローチして、感じたことや気づいたことに焦点を合わせて意識化や言語化を目指すもので、児童期からでも実施の適用性が高い。アスリートは比較的若い発達段階にあり、キャリア・アンカー(キャリア・カウンセリング)、TAE、SGEの方法の中であれば、TAEとSGEが実施して自己理解を促しやすいであろうと考えられた。

本研究では、「TAEによる自己PR作成」のワークシートとSGEによる関係性の構築、自己理解をねらいとしたエクササイズを大学生アスリートに実施し、振り返りの内容を分析した。大学生アスリートに実施した事例において、TAEによる自己PR作成は、キャリア・カウンセリングを通じたものよりも、自分らしさを表現できるものを作成できていると調査協力者により認識されていた。一方で、実施する際に参加者間の信頼関係と、実施担当者のスキルが重要であった。

SGEは、構成的であることが主たる特徴であり、心理発達の幼く、他者との関係性構築について課題である大学生アスリートには実施しやすさがあった。また、SGEの中でも「全体シェアリング」は非構成的であり、熟練者による実施が望まれるが、信頼関係が得られている大学生アスリートにおいて実施した場合に、関係性に対してポジティブに反応し、自己理解が促される者が確認できた。しかし、個人の特徴によっては抵抗を示す者もいるため、その特徴と実施の際の留意点については引き続きの検討課題であると考えられる。

(4) 青年期・成人期の発達障害の特徴を見せる人への支援との関連

当初の研究目的に加え、「青年・成人期の発達障害を持つ人とその支援」に関わる文献を検討し、関連する事例について成果公表を行った。この過程で、発達障害の特徴に関する先行研究と具体的支援の方法が、引退期のアスリートを支援する方法に何らかの貢献を与える可能性があるとの示唆を得た。この点については、発達障害の特徴や理解を踏まえ、今後も検討していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1. Olivia C. OGAWA, Approachability of the Guiding Figure: New Perspectives for Continued Organizational Career Support after Athletic Retirement, 商経学叢, 59(2), 2012, 523-537.
2. 小川千里, 発達障害の傾向を見せる大学生を大規模校で支援する—アスペルガー症

候群の場合— ,商経学叢 ,58(3) ,2012 ,383-399 .

〔学会発表〕(計 10 件)

1 . Olivia C. OGAWA, Masashi Suzuki, Research into the Psychological Development of Japanese University Athletes during Retirement Transitions, 28th International Congress of Applied Psychology, 2014 年 7 月 11 日 (Forthcoming) , Paris, France.

2 . 小川千里 , アスペルガー症候群の傾向を示す大学生への支援プロセス—大学ゼミナールにおける事例—、第 11 回日本教育カウンセリング学会研究発表大会 , 2013 年 8 月 11 日 , 富山大学。

3 . Olivia C. OGAWA, Career-Related Exercises for Self-Discovery among Top Japanese College Athletes, Presented at the 35th International School Psychology Association Conference, 2013 年 7 月 17-20 日, Porto, Portugal.

4 . Olivia C. OGAWA, A Method for Supporting Students Who Have Difficulties in Class with Asperger Syndrome - Type Students, Presented at the 3rd International Conference on Health, Wellness and Society, 2013 年 3 月 16 日, Sao Paulo, Brazil.

5 . 小川千里 , 大学生アスリートの自己 PR 作成支援に関する一考察 - TAE メソッドに基づく文章作成法を用いた就職活動用自己 PR 作成プロセスと気づきの検討、第 63 回日本体育学会研究発表大会 2012 年 8 月 24 日 , 東海大学。

6 . 小川千里 , アスペルガー症候群の傾向を示す大学生とその周囲の学生への支援—大学のゼミナール運営の留意点—、第 10 回日本教育カウンセリング学会研究発表大会 , 2012 年 8 月 19 日 , 京都精華大学、精華短期大学。

7 . Olivia C. OGAWA, Characteristics of Japanese College Athletes from the Perspectives of Developmental Psychology – Analyzed by TAE Steps –, 16th European Conference of Personality, Trieste, Italy. 2012 年 7 月 13 日 , ポルト、ポルトガル。

8 . Olivia C. OGAWA, Quest for Job-Related Exercises for Effective Self-Assessment among Top Japanese College Athletes, Asian South Pacific Association of Sport Psychology Congress (ASPASP2011), 2011 年 11 月 13 日, 台湾、台北。

9 . 小川千里 , 不登校の様子を見せる体育会大学生に対する組織的支援 , 日本教育カウンセリング学会 (JECA2011) 2011 年 8 月 11 日 , 北海商科大学。

10 . Olivia C. OGAWA, The External Support Systems Required for Japanese Professional Athletes in Retirement Transition, European Congress of Psychology (ECP2011), 2011 年 7 月 5 日, トルコ共和国、イスタンブール。

6 . 研究組織

(1)研究代表者 小川 千里

(Olivia C. OGAWA)

小樽商科大学・大学院商学研究科・准教授

研究者番号 : 90340760